

# 青 少 年 部 門

## 選 評

### 「それだけ」の輝き

青 山 七 恵

「雪崩」は心に渦巻くさまざまな矛盾を、複雑さもわからなさもまるごと痛みとして「私」が静かに受け入れるまでの過程を描いていて、短い枚数ながら率直な書きぶりが光る作品だった。書くことを楽しいと思えないのに、小説から逃げたくない。親友のことが好きなのに、恨んでしまう。女子高生が内なる矛盾に苦しむ、ただそれだけの話ではあるけれど、生きていろいろあるなかで、矛盾を直視する気力を失ってしまう前のおぼつかない心の揺れを掴む言葉が、初々しい輝きを放っていた。素っ気なくらいに短い作品ではあるものの、書きたいことだけに集中し、よそ見をしなかった著者の潔さにも感じ入るものがあった。

「可憐夜の向こう側」は、海月の骨を探しに冒険に出た少年少女の二日間の物語。「枕草子」や「星の王子さま」を引用しながら、夕暮れの海や蛍の光の前に交わされる二人の会話に読み応えがあった。「言葉に縛られている」ことを言葉で説明するのはややこしい。でも、手強く複雑なからまりをどうにかこうにかほぐそうとするその手つきに、真摯さを感じた。

「音を紡ぐ」は、ピアノを愛する主人公の少女と彼女を見守る人形の心の繋がりを、飾り気のない素朴な文体で浮かび上がらせている。進路に悩む少女がこわごわながらも、信頼を置くもの、あるいは自らの過去そのものに背中を押され、小さな自立の一步を踏み出す瞬間が、慈しむように大切にとらえられていた。